

春燈

2019 March

3月号



主宰の句

安立公彦

ひととせを顧みよとや冬夕焼

平成の鐘声清に年は逝く

初明り無心に受くる櫛かな

戦なき御代や年酒に酔ひもして

松過の文書や早も机上占め



安住敦の句

一片の落花といへど惜しまねば

『柿の木坂雑唱以後』平成三年

昭和六十年作。敦師は「春燈」主宰、「朝日新聞」選者、「俳人協会」会長という重責を負う多忙な明け暮れの中、散りゆく一片の花への思いをよんでおられます。終戦間際の対戦軍攻撃訓練、戦争に失われた無数の尊い命に思いを馳せ、櫻、牡丹、菊、梅、桜と様々な美しい花のほかない命を尊んでいる一句。何というお優しい人柄があられている句なのだろうかと思えます。

神田 恵琳

安住敦の句

夏帽や反吐^{へど}の^どでるほどへりくだり

『歴日抄』昭和四十年

自身のプライドを犠牲にしても、守るべき何かがあるとは何と崇高なことだろう。インパクトのある表現は、「夏帽」という季語を得て命を吹き込まれた。

深く腰を折っている目には口惜し涙が滲んでいたかもしれない。そんな己の姿を冷静に凝視するもう一人の存在を読み手に感じさせることで、この句は単なる自虐とは全く別の次元にまで高められている。

川崎真樹子

燈下集



○ 本田 保

黙秘権行使してゐるマスクかな
風格の滲み出でたる木の葉髪
雪女たくみな言葉使ひかな
進化せしか退化せしかと去年今年
街灯のまだついてをり冬至の朝

○ 瀬戸 峰子

着膨れて流星群を仰ぎ待つ
言はですむ以心伝心おでん鍋
指先に頁繰る音冬の夜
寒鴉木の天辺に賢者振る
警邏せるごとき歩みの寒鴉

○ 今井 弘雄

老いてなほ愛こそ大事クリスマス
寒き夜はスクラム組めよ六地藏
人知れず侘助散つてしまひけり
枯葉散るあたかも申し合はせてや
一年の良きも悪しきも除夜の鐘

この年の無事を願うて初日の出
夕暮の風の誘ひ枇杷の花
朔風に海鳥はただ鳴くばかり
風に乗る遠寒杵や闇を切る
武蔵野の風漉く音や冬木立

○ 清水美子

年の市子の住む街を通りぬけ

苔のむす桜の冬芽希望の芽（葛城山）

運命の微笑み信ず冬の虹

歳晩の大川忙し水脈の綾

思ひがけぬ物の届きし大晦日

○ 片山博介

黒姫はもう白きころ一茶の忌

夕風の鳴らすばかりや蓮の骨

沖合の冬霞より夕汽笛

寒夕焼列車の窓を射とほせり

雌伏せる荒星どちの息づかひ

○ 府川昭子

グラデーション刻々変はる紅葉山

看護師のつぶらな瞳寒昂（膝関節手術入院）

病室の樂しき語らひ冬の夜

病室は人生の坩堝冬灯

爪白く長く伸びるや雪催

○ 永島雅子

筆まめな友よりの文一葉忌

上京の友囲みぬる帰り花

注連飾ガレージの中の三輪車

夫と眺むる庭の冬芽や日に照らふ

読み返す家族の記録古曆

○ 矢口笑子

電飾に負けてはをらず冬紅葉

咳込んで世の中少し遠くする

鍋の蓋コトコト唄ふ聖夜かな

相席の人も鍋焼雨催

帳付けの黒ペン赤ペン年詰まる

○ 松山三千江

何掴む仏手柑に指六本

松手入れ青年新の梯子持ち

むかしおもちやの木地の積木や山眠る

引出しに丸葉転ぶ師走かな

歳晩や殊に我が身をはげまして

○ 赤羽陽子

白障子開くれば青き空のあり
山茶花のこぼるる庭のほの明り
庭石を我がもの顔に寒雀
しんしんと脳のどこかが冷えてゆく
冬の日を戻りし部屋の暗さかな

○ 篠原幸子

石路日和犬のとりもつ縁かな
やすらぎの雨をふふみて冬の薔薇
思ふほど身軽になれず年つまる
檜枯る空明るうてさみしうて
初富士やひとむらの雲ありてこそ

○ 藤原若菜

遺影みな面差し若き寒さかな(蹟園・遊覽館二句)
蟠る毛綱の太さうつた姫
結ぼるる神籤より立つ冬の蝶
すめらぎの若き日の恋冬木の芽
平成の残照しばし年送る

○ 大文字孝一

ひとり来て風の声聞く枯野かな
はしよることあれこれ多く年詰まる
咳込んで話の腰を折られけり
とり急ぎ用件のみと空つ風
大正の香りを残し障子閉づ(代官山朝意邸)

○ 和田絢子

序列凜と城代筆頭義士まつり
義士祭や赤穂の師走極まれり
峠ひとつ越ゆるや備前冬椿
艶なるものに小粒ながらの冬母
夫逝きし齡追ひ越し十二月

○ 神田恵琳

初日の出光の帯は沼に散る
初鴉杜に一声のこしをり
年賀客送りて来り舟着場
大寒や峡谷渡る猿の声
大利根の土手に草摘む日和かな

余言

安立公彦

冬眠に入れず現の大熊座

片桐てい女

動物の中で、蛇や栗鼠などは冬眠に入るが、熊などは時に覚醒して摂食や排泄などを行うので、擬似冬眠と呼ばれている。「冬眠に入れず」は、その事実を正しく表わしている。但しその対象が「熊」でなく、「大熊座」であることに、この句の非凡さがある。まさに「現の」である。

星座を見ると、大熊座の北天が北斗七星となっている。雄大な星座だ。私たちはこの句を見つつ、冬天の星の世界に思いを馳せるのだ。

枇杷の花此処にも人の住まぬ家

山内 四郎

正に現代社会の縮図と言えよう。私の住む町の一郭にも長い間空家となっている家がある。そこは私の歩行の折り返し地点となっていて、通るたび寒々しい思いがする。

この句の空家は、広い庭を持ち、今その庭の枇杷の花が垣根越しに見えるのだ。この花はしかし色彩に乏しい。枝

の先にもつさりと咲く枇杷の花を見つつ、作者は、「此処にも人の住まぬ家」と、嘆きにも似た思いを抱く。そしてその嘆きは、かすかな寂しさを伴う句と言えよう。

変はる世にまだかはらぬ雪下ろし 小林のり人

作者の住まいは新潟県長岡市。雪の多い地域だ。「雪下ろし」は北国では日常の仕事だろう。若い人が都会に出て行く今、留守を預かる人にとつて、この仕事は危険を伴う。屋根から落ちて死亡するというニュースはよく聞く。

現在各地にRC造のマンションが建てられている。しかし雪はマンションも民家も等しく降り包む。雪下ろしは今後も続くことだろう。「いまだかはらぬ雪下ろし」は、嘆きと共に、その対策への模索も感じられる。

左目の見ゆる幸せ福寿草 諸戸せつ子

作者はこのところ欠詠が続いたが、三月号から出句が再開された。今月号の通信欄に、右目は視界ゼロとある。眼が見えないということは、生活の大方を失うことに通じる。ご苦労の多い毎日と思う。

作者はしかし、「左目の見ゆる幸せ」と、自らを諾っている。こういう思いは立派だ。高い香気を放つ言葉と言え

よう。句を見る私たちの気持も明るくなる。更に、「福寿草」との取合せがみごとである。

かにかくに毛皮重しと妻老いぬ 柴崎甲武信

今年の作者からの年賀状を手にした人は、そこに写る富子夫人の姿に驚いたことだろう。痩身という言葉そのままの姿だった。昨年から病気で入院中とは聞いていたが、その細身に、しばらくその賀状から目が離せなかった。

「毛皮重しと妻老いぬ」は、甲武信さんの思いそのものだろう。富子さんへの労りの思いが良く出ている。今はただ、十分な養生の許、快癒を願うばかりだ。しかし上五の「かにかくに」は余裕がある。安堵した。

鏡中の自分にまづは初笑顔 大室恵美子

「初笑顔」の主季語は「笑初」。他に新年の季語には、「泣初」、「話初」など、生活の万端に及ぶ。そこに俳句の奥深さを見る。この句、「鏡中の自分に」が寸劇を見ているようだ。手鏡を見る作者の姿が良く出ている。更に、「まづは初笑顔」が読む人の笑顔を誘う。

この句の前に、〈長病みて空白多き日記果つ〉がある。長い闘病を越えての「初笑顔」だ。「心」と「身」は相和する。この句、「まづは」の余裕が良く効いている。

雑草の思はぬ深さ冬ぬくし 赤岡 茂子

「冬ぬくし」の季語は、口にするだけで気持の落ち着きを覚える。「小春日」とはまた違った思いだ。作者は今、思い出したように公園の一隅の草むらに足を運ぶ。見るとその一带雑草が伸びている。立木の枯葉を抜けて伸びる雑草には、「冬ぬくし」がふさわしい。

「雑草の思はぬ深さ」に、作者の驚きが良く出ている。同時に、物を見る感性が、その驚きをやさしく包んでいる句と言えよう。

白湯甘し静かに暮るる翁の日 齋藤 晴夫

「翁の日」は「芭蕉忌」。「時雨忌」、「桃青忌」の傍題もある。芭蕉の忌日は元禄七年旧曆十月十二日、五十歳だった。今年は十一月八日に当たる。立冬でもある。

この句、読んでいて、十七文字の中に一語の無駄もないことを知る。「白湯甘し」は喉を潤す白湯でなく、服薬の白湯だろう。「静かに暮るる」は、騒がしさが無いのではない。自身の心の有り様を述べているのだ。それらを受けて、「翁の日」の座りが見事だ。優れた表現の句である。

今月の「余言」は高齢同人に集中した。どの句も感性豊かだ。俳句の感性に年齢は問わない。健在を祈るのみ。

当月集

安立 公彦選



○ 近藤 真啓

ひととせの吾をみてをり古曆

白妙のねぎの香の立つ蕎麦湯かな

煩惱の音の幾重や年果つる

卓囲むひとりひとりの手に蜜柑

つくづくと父似となるや雑煮椀

○ 佐藤 玲子

遥か下に見ゆる吊橋紅葉中

大吊橋噓をしても揺るるかに

どの家も軒先庭先懸大根 三喜

リハビリの予約書き込む新曆

嫁も娘も還曆となる年迎ふ

○ (故) 山崎 刀水

極月の余命告知や瞑想す

行く年の今日のひと日の重さかな

玄関に幼子の靴お正月

治療なき緩和の菓飲む冬夜

荒星や人は別れを繰り返し

○ 山下 健治

ムンク展出づや上野の冬夕焼

古書店をさ迷ひぬたり年忘

行く年や掉尾を飾る浅草寺

仲見世をのがれて路地の冬薔薇

万太郎の句碑をなぞるや実万両

○ 山浦 紀子

紅筆の穂先乱るる一葉忌

携帯のアラームの声日短

冬晴や航跡一路隅田川

犬と行く足裏に優し枯葉道

磨き上ぐるケトルの音色雪催

春燈の句

安立 公彦選

食卓に香を放ちぬる棋檯の衷

東京 那須 禮子

日向ぼこ空を広しと仰ぎては

着ふくれて濯ぐや卒寿いつしかに

子の指図受くる日々なり木の葉髪

大雪来氣象予報士まづ震へ

初明り白峰凜と会津富士

書初のと紙に匂ふや奈良の墨

初春や米寿・傘寿のダイヤ婚

亡き夫と参ぜし秋の園遊会

小鳥来る苑にコーラスひびきををり

老いし我に原宿の町冬隣

亡き夫の在らばと思ひ糸編む

苦も楽も交々ありて年暮るる

門付けの三河万歳遙けしや

神奈川 犬嶋テル子

羽子つきし青山通りなつかしや

着ふくれて黄金バットの紙芝居

飼猫の甘え上手や炉を開く

みちのくのランプの宿の濃餅汁

冬萌や亡き夫の椅子修復す

語部や信濃の宿の炉を囲み

初雪や女四代の桐箆筒

久闊を叙する姉妹や枇杷の花

自販機の照らし出したる懐手

緋床几に並びふうふう大根焚

狭庭なれどたわわに成りし実南天

内定の厚き封書や冬日濃し

真つ直ぐに鴨二羽並び水尾を引く(祝・結婚)

曾孫らの声音次つぎ初電話

埼玉 長谷 仁子

兵庫 中上 馥子

東京 池上 昌子

